

「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

(天災を学んで平和のボケ予防)

川柳自選句 盛町
木村自然児 平成5年

「贅沢に食う麦飯の味が無い」
「笑う山みどりを人間伐り倒し」

東海文芸 詩 無情
な雨 赤崎町 ちばた

「悦ぶ神はあるだろうか
行く家のないこの私を
救わなければならぬ人
を」

追いだすだろうか
出来たら我がふところ
の中に
そう思っているに違いない

7月13日第5面の文芸欄からの抜粋である。

木村自然児の川柳の日常の生活批判にどのように対応すべきか、ちばただしの詩「無情な雨」のセンチメンタルな訴えをどうとらえるのか、大雨洪水、津

波など多くの自然災害を被りながらも、生き続けるための経験を積み、知恵を育ててきた地域の文化とはどのようなつながるのか、いろいろな思いと心が動きます。

(引かれ者の小唄)

7月5日の第一面の世迷言には湾口防波堤建設に対する批判記事が載っている。「刑場へ引かれていく罪人が強がりと言うことが「引かれ者の小唄」なら、小欄の心境はまさにそれだ。大船渡湾港防波堤の復旧に大船渡市漁協が合意、国交省と同意書を交わしたことで、もはや異論をさはいはさむ余地がなくなつたからだ」と述べて、チリ地震津波の後に建設された湾口防波堤による湾内海流の停滞による湾内漁業や海藻産物業への影響は色々指摘されてきたが、それに対する納得のいくような説明なしに、一気に国交省の提案を安易に呑みこんで

しまった。高台移転の話も夢と消えてしまった。一度決まった国策を覆すことの困難なことを八ツ場ダムの札を引いて述べている。しかし、(引かれ者の小唄)で泣き寝入りで済ましていいのだろうか。

江戸時代に米の凶作と南部藩の過酷な重税に苦しんだ南部の農民を見て、南部八戸の町医者であった安藤昌益は「自然真営道」という思想を以て、これを百年後の世の人々のために用いるとして、古今東西の思想の中から、普遍性のある思想教育を興している。「森と水と命の惑星」国際会議と地域と世界の心と魂を詠むがこのような思想を生み出す、地域教育の育成につながることを願っておりま

(歴史と科学から学ぶ)

7月8日の第8面には「自然を生かす防潮堤造りを 横浜国大宮脇教授 がれき再利用も」推奨 陸前高田」が掲載されている。自然とコンクリートを融合したブランチブロック工法による「防災の森」を目指している。既に仙台市ではこのブランチブロック工法による「防災の森」の取り組みが始まっていると報道してい

る。

長い歴史を通して、三陸沿岸は幾度も大きな津波被害を被ってきた。7月11日の第8面には「空中散歩 高台移転のまち(大船渡市三陸町吉浜)」が掲載されている。明治三陸大津波のあと、当時の村長たちが低地にあった集落を高台に移転したが、今回もいかさたが、元々の低地を田んぼに改造し、所来の震災に備えたのです(平成20年3月撮影)。

「高台移転」と「防災の森」は、歴史と科学と自然から学んだ取り組みである。巨大なコンクリート防波堤は歴史と科学と自然とを深く分析した結果なのであるか?三陸沿岸のコンクリート防波堤はどれも根こそぎ津波にさらわれていた。この事実には防波堤工学はどううたえるのか。原発への科学技術的限界は今や、世界の大きな関心を呼び起こしており、巨大津波へのコンクリート防波堤の技術的限界も、これを真剣に考える必要があると思ふ。

(由らしむべく知らせむべからず)

述べたが、今回は日夜新聞テレビをにぎわしている米国のオスプレイと日本の安全保障に關して述べる。戦後、マッカーサー極東司令官のもとで行われた、東京軍事裁判、平和憲法の押し付け、これらに対して日本の政権を担当した政治家や官僚が(由らしむべく知らせむべからず)で国民を飼いならしてきた、長年の政治行動への、国民の不信が表面に現れてきていることである。我々は、米軍基地を抱えて苦しんできた沖縄県民の苦痛を他人事ではなく、自分の事として受け取って考えなければならぬ局面にきているのである。3・11の東日本大震災からの復興の過程で、我々は政府の(由らしむべく知らせむべからず)を現実のこととして捉えることを学ばなければならぬ。日本の安全保障は戦前戦後を通して政治家と官僚たちの自己保存と利己利益につながる(由らしむべく知らせむべからず)の影響のもとで行われてきたと思う。日米安全保障とオスプレイはまさにこの弊害をもろに受けているのである。長い間、飼いならされてきた(由らしむべく知らせむべからず)の弊害を打破する時が来ている。